鎮守の森だより

NPO法人社叢学会ニュース
第102号
2019年11月1日

今こそ　社叢から地球環境への一歩を！

身近な自然の変化にご注目ください

前号を発行した直後に千葉県を襲い、大規模な被害、とりわけ長期間の停電をもたらした台風15号の復興もままならない中、再びの大雨、さらには東日本の広範囲にわたって甚大な洪水被害をもたらした台風19号と、言葉を失う自然災害が続いております。被災地にお住いの皆さまにおかれましてはご無事でいらしたでしょうか？　住宅等の被害はいかがでしょうか？　及ばずながらお見舞い申し上げます。

洪水被害により、代々受け継ぎ、豊かな作物を産み出してきた農地はもとより農機具も泥にまみれ、中には営農をあきらめる事例も見られると聞いております。まさに地域崩壊を引き起こしかねない事態ではないでしょうか。

これら全てが地球温暖化に起因すると断じるには様々な議論もありますが、昨今の気候不順は否めない事実でしょう。16歳の少女の涙の訴えを揶揄する為政者の言動にはただ呆れるばかりですが、ほんの小さな一歩でもよいのです。手始めに身近な自然である社叢に足を運んで頂くだけでもよいと思うのです。

社叢学会では、今後とも「社叢見守り隊」事業等を通じて社叢から地球環境への歩みを進め続けていきたいと考えています。

次回予告【第87回関西定例研究会】

◆日　　時：11月17日(日) 13：00～16：00
◆集合場所：大仙公園観光案内所(ＪＲ阪和線「百舌鳥駅」より北西へ350m)
◆テ ー マ：百舌鳥古墳群見学（ヴォランティアガイドと共に）
◆同　　行：渡辺　弘之(社叢学会副理事長・京都大学名誉教授)

※10:00～12:20　社叢インストラクター養成セミナーを堺市博物館にて開催。古墳の概要説明と博物館展示見学、渡辺副理事長による講義「社叢としてみる古墳」など。一般会員も参加可（参加費：一般会員@2千円　社叢インストラクター養成ミナー既修者@1千円）

原 稿 募 集 中 ！

「鎮守の森の活動報告」(祭、音楽会、調査、ワークショップなどの実施報告、抱える問題など)や各地の「社叢訪問記」(各1,200字程度)の投稿締め切りは12月25日(水)必着です。

お気軽にご投稿ください！

＊ 書評欄では会員の皆さま方の著作を取り上げています。出版された方は、ぜひご献本下さい

第85回　関西定例研究会　報告

2019年7月27日
（於　賀茂別雷神社）

賀茂別雷神社の境内の樹木

話題提供：　松谷　茂（京都府立植物園名誉園長）

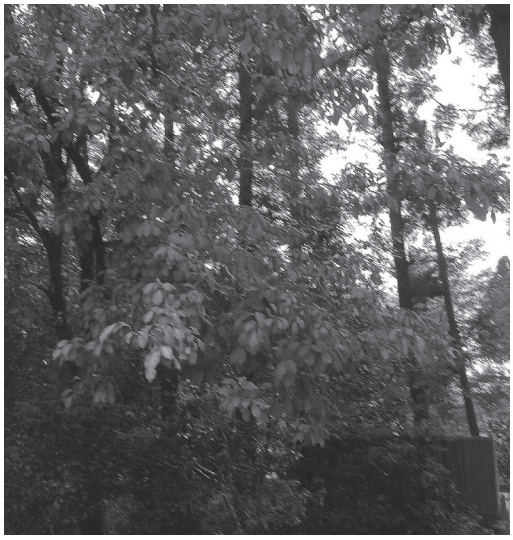
※ 当日は境内を歩いて樹木を見ながら解説を聞く予定だったが、降雨のため、室内でそれぞれの特徴を聞いた

立砂に飾られているのが何故二葉と三葉のマツなのか、長年、疑問に思っていた。日本に生息するのは二葉のアカマツ・クロマツとゴヨウマツで、三葉は日本にはないからだ。田中宮司から奇数の陰と偶数の陽という陰陽思想を表していると聞き、長年の疑問が解決した。以下に樹木の特徴を説明する。

ツガ＜マツ科＞：樹高が高く、花や葉を間近でじっくり見る機会がない。これも隣の木とのバトルの結果だろう。松かさができるものはマツ科で、ヒマラヤスギもスギとはいうけれどもマツ科だ。ツガの種は松かさの鱗片の付け根にあるが、ここにも生き抜く戦略が秘められている。生き抜く戦略から植物を見ると植物の凄さがわかる。

種が飛ぶ戦略として、風散布は風をうける翼をもつ。本体の近くに落ちた実は多くが発芽するが、群生しているために、動物などの餌にされると一斉になくなるし、病気になると一気に伝染してなくなる。その結果、遠くに飛んだものの方が生残率が高い。植物は生き抜くためにいろんな戦略を持っている。

ヒトツバタゴ＜モクセイ科＞：月光椿の横にあって「ナンジャモンジャノキ」と呼ばれるものの正体。花が咲いていないと、なかなかその存在がわからない。「ナンジャモンジャ」についてはトチなどをそう言われることもあるが、大筋にはヒトツバタゴとされている。



ヤマボウシ＜ミズキ科＞：国産で果実ができる。ハナミズキ（アメリカヤマボウシ）は北米原産で、街路樹として植えられ増えている。違いは花・果実で、ヤマボウシの果実はイチゴのようで可食。とはいうものの美味しいものに当たったことはない。ちなみに花びらに見えるのは苞葉でヤマボウシのものは尖っている。開花時期も違い、ハナミズキは4月でヤマボウシは6月。

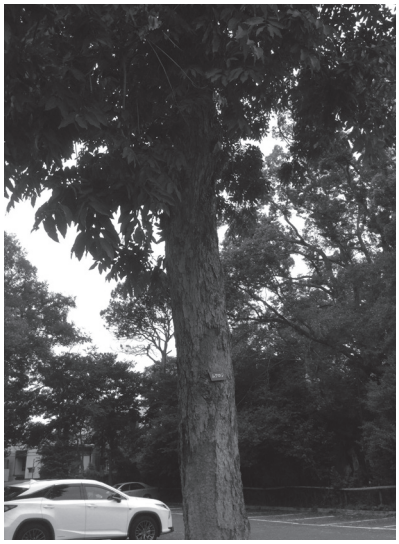
オガタマノキ＜モクレン科＞：神社でよく見る。その木を目指して神さまが降りるという招霊木といわれる。成長が早く、高木になるので花をのぞき込んで観察することができない。オガタマノキの隣にトウオガタマがあるが、唐とかカラとつくのは中国原産であるサイン。花はバナナの匂いがするのですぐにわかる。カラタネオガタマとも言うが、種ができるのは見たことがない。

メタセコイア　＜ヒノキ（スギ）科）：この木があるのに驚いた。落葉する針葉樹で葉はヌマスギとよく似ている。日本で落葉の針葉樹といえばカラマツが多い。メタセコイアは対生だがヌマスギは互生。枝も対生でじっくりと見ているとなんとなくわかるが、色々見ていると曖昧なのもある。鈴のような実ができる。

ちなみにヌマスギは沼にしかはえるニッチがない。京都府立植物園では花菖蒲園の横にあって、地面から根を出す気根を見ることができる。

モッコク＜ツバキ科＞：形がきれいで庭木には欠かせない。葉がつるつるで、葉柄の色に注目するとよくわかる。花の咲かない木はないわけで、モッコクにも目立たないがきれいな花が咲く。

ムクロジ＜ムクロジ科＞：枝先に特徴があり、落葉時期に観察するとわかりやすい。枝が込んでいるところは鹿の角のようになる。葉の付き方は偶数羽状複葉。



花は臭いが色々な虫が来る。子房は3室といわれるが、現実的にはなかなか3室揃っているものはない。果実は真っ黒で硬く、羽子板の羽の錘になる。果皮にはムクロジサポニンが含まれており、水を加えてこすると泡立ち、石鹸ができる。社寺に植えられることが多いが、巫女が鬼を征伐するのに使ったという中国の伝説があり、以後、神社に多く見られることになったという。

エノキ・ムクノキ＜ニレ科→アサ科＞：科の分類が変わった。この両者は葉を見なくても木肌でわかる。エノキはつるつるで、ムクノキはある程度の樹齢があるとがさがさになる。境内の東に大きなムクノキがあるが、これは河川の氾濫原に生えるもので、人工的に植えたものではない。賀茂街道にはニレ科の大木が多い。葵橋近くには85年生くらいの大きなアキニレある。昭和10年の大水害で賀茂川の大被害で多くの木が流れたが、御薗橋改修の時に西のケヤキを伐採したので株本をもらって年輪を数えたら80＋αとなった。ということはこの水害直後に生えたものだと判断できる。初期成長が良いのも特徴的だ。葉は鋸歯の出方が違い、ムクノキは鋸歯がある。多くの花が咲き、実は食べられるが美味しくはない。エノキには板根があり倒れない。

イチョウ＜イチョウ科＞：誰でも知っている木だが、境内にはあまりない。葉の付き方に特徴がある。短枝の先につき、長枝の先には出ない。これも太陽の光を受けるための戦略で、銀杏の赤ちゃんが上を向いているのも同様の戦略だ。

北山杉：1本仕立ての床柱としての需要はなくなったが、地上部の直ぐ上から多くの枝がでる台杉は庭木として人気がある。

イチイガシ<ブナ科>：大きな個体が二の鳥居と三の鳥居の間にある。その年に出た枝の葉裏には黄色い毛があり、鋸歯がしっかりしている。どんぐりもできる。

ストローブマツ・テーダーマツ＜マツ科＞：共に北米原産。ストローブマツは五葉でテーダーマツは三葉。日本のアカマツ・クロマツは2葉で針葉が長いが、ゴヨウマツは葉が短い。世界では三葉と五葉のものが多い。

カゴノキ＜クスノキ科＞：河原によく見られる樹木で幹肌が鹿のような模様になっていることからこの名がある。常緑樹で、京都は北限に近い。

タマミズキ＜モチノキ科＞：これがあるのには驚いた。雌雄がわからないが、秋に赤い実をつけるのでその時期に確かめたい。八坂神社裏山にあるが、周辺の木が倒れたため、市内からでも見える。

タラヨウ＜モチノキ科＞：雌株で赤い実をつける。葉は大型の肉厚で長楕円形。裏側に硬い物で文字を書くとその跡が黒く変色し、葉が枯れても残るため「ハガキノキ」という別名がある。こうしたいわれから郵便局の前によく植えられている。

サカキ＜モッコク科＞：枝先がナギナタ状で、近くで見ると特徴がわかる。基幹が真っ直ぐで神が降りるのにふさわしいとされる。常緑で姿が美しいので「栄える」から「サカキ」となったという説もある。花は良い香りがする。

源氏物語に「賢木(さかき)」という帖があるが、ここで疑問がある。光源氏と六条御息所が交わした和歌に「…榊葉の香りをなつかしみ…」とあるが、サカキの葉に香りはほぼない。これはシキミ＜マツブサ科＞ではないのだろうか。ちなみにシキミは実に毒があり、「悪しき実」からシキミになったといわれる。シキミは仏事に使われる。

センダン＜センダン科＞：「栴檀は双葉より…」といわれる熱帯の樹木で花は紫でよい香りがする。おしべの中にめしべがある。実は硬く、数珠を作ることができる。

ナギ＜マキ科＞：神社に多く、雄雌異種の樹木。葉は楕円形で広葉樹に見えるが針葉樹である。

ツバキ「月光(がっこう)」＜ツバキ科＞：ヤブツバキ系。ツバキにはヤブツバキ系とユキツバキ系があり、花を見ると、しべが合着しているか1本1本かで見分けられる。

ヤブツバキは下北半島が北限でユキツバキは日本海側のみに見られる。園芸品種が多いが、欧米には分布しない。

御所桜・斎王桜＜バラ科＞：エドヒガンの枝垂れ品種。御所桜は根元が膨らんでいる。境内のサクラはいずれも美しい花を咲かせる。なお、サクラには様々な種類があるが、ソメイヨシノなどは樹皮に横ラインが入っており、幹で見分けられる。

フタバアオイ＜ウマノスズクサ科＞：連理木(何の木かわからない)の足元で育成している。地下茎で横に這って行く。萼片の先端が反っているのが特徴。

book book book book book book

神仏の森は消えるのか　-社叢学の新展開-

渡辺　弘之著

植物、土壌動物や昆虫についての深い知見に加え、社叢の歴史的側面にも関心を寄せ、京都はもとより全国の社叢を巡り歩いてきた著者の、社叢学集大成ともいえる一書。

社叢の成り立ち、人との関わり、さらには現代的な役割など、社叢の奥深い意味や意義、問題点が科学者らしい冷静な語り口で解明されていく。森林としての側面から社叢を見る章では、専門家らしい厳密さの中にも窺える、日本のカミのおおらかさに通じる柔軟なまなざしに著者の人となりが現れている。タイトルの「…消えるのか」という刺激的な文言の裏にある「決して消してはならない」という篤い思いを読み取って戴きたい。

（ナカニシヤ出版　定価2千2百円＋税）

どんぐりの生物学　-ブナ科植物の多様性と適応戦略-

原　正利著

ブナ科植物の果実であるドングリを切り口にした1冊だが、その内容はドングリにとどまらない。恐竜が闊歩していた中生代白亜紀後期に誕生したブナ科植物の歴史とその変遷を皮切りに、ブナ科植物の多様性やドングリの形、実生の有様、昆虫との関係、ほ乳類・鳥類との関係、さらには菌類との関係など、森羅万象がドングリ（＝ブナ科植物）に関わることで地球環境を作り上げていることが理解できる。

また、東南アジア、特にタイ・マレーシアでの調査研究を軸とした章は、専門的でありながらも一般の読者にもわかりやすい記述で興味深い。

豊富なカラー写真、豆知識が得られるコラムなど、ドングリ拾いのお供に恰好の書ではないだろうか。　（京都大学学術出版会　定価2千円＋税）

事務局から

- 今年度の会費未納の方には振替用紙を同封いたしました。何かと多端な折とは存じますが、社叢学会は会費で運営しております。ご理解とご協力をお願い申し上げます。なお、12月末日までに入金の確認ができない場合は、「鎮守の森だより」等をお送りできなくなりますので、悪しからずご了承下さい。退会をご希望の場合は、会員番号とお名前をご記載の上、Fax・Mailでその旨、お知らせ下さい。
  銀行振込も可能です。三菱UFJ銀行　京都支店　普通口座6720345　特定非営利活動法人社叢学会　理事長　薗田稔　です。
- 別記の通り、『社叢学研究』18号への、身近な活動報告と社叢を訪れた時の感想などを募集しています。「社叢訪問記」では、今回の災害の被災状況なども含め、どんなことでも結構です。ぜひお寄せください。

編集後記

はばかりながら（ん?!）、中学時代からのラグビー好き。大学出たての頃、東京へ行くというと友達が「何しに？」「相撲とラグビー見に」「はぁ？女子はスキーとテニスっしょ」「だって、日本選手権（学生と実業団の頂上対戦！）行かな」。爾来、苦節ん10年。宿澤ジャパン以降、一体いつになったら勝つん？　タックルをされるとぴょ～～んとふっとばされるんやから、しゃーない、お嬢様ラグビーやん。とぼやき千万。それがっ！　前回W杯ですよ。奇跡が起きた！　びっくりしたなぁ！

でかいおっさんが寄ってたかって押し競まんじゅうかいと愛でつつ、実はちっさいヒト（スクラムハーフとスタンドオフ）がとても気になる古漬けファン、全試合に熱狂ちう。　（藤岡　郁）

次回予告【第80回関東定例研究会】

◆日　　時：1月25日(土)　14：00～16：30
◆場　　所：國學院大学・渋谷キャンパス120周年記念2号館2104教室(変更の可能性あり)
◆テ ー マ：玉川上水生き物調べ―タヌキと花マップ―
◆講　　師：高槻　成紀（麻布大学いのちの博物館上席学芸員）
◆上映作品：未定
※　共催：ポーラ伝統文化振興財団・國學院大學環境教育研究プロジェクト

発行人　社叢学会事務局　〒604-8115京都市中京区雁金町373番地みよいビル303号
TEL・FAX 075-212-2973
URL http://www.shasou.org　E-Mail　shasou@ams.odn.ne.jp
社叢学会関東支部　〒368-0041　秩父市番場町1－1　秩父神社社務所内
TEL080-1514-5032　E-Mail　shasougakkai@hotmail.com